

2023年 京都キリスト召団聖日集会 講筵要旨見出し

2023年1月8日 「君は葡萄樹 我らその枝」

2023年1月15日 「主の祈り」を「我が祈り」とする

2023年1月22日 「我は生命のパンなり、我を食らい、我を飲め」

2023年1月29日 「我は、そして汝らは、世の光なり」

2023年2月5日 「生命の御霊の法に生きる」

2023年2月12日 「終末的『愛』に生きる」

2023年2月19日 「主キリストより賜る『希望』に生きる」

2023年2月26日 「霊に燃え、祈りを恒(常)にし」

2023年3月5日 「別れに当たって」

2023年3月12日 「神讃美・キリスト讃美の人生を！」

2023年3月26日 「我は生命のパンなり。我を食らひ我が血を飲め」

2023年4月2日 「『御復活記念の日』を迎えるに当たって」

2023年4月9日 「永遠の生命」(キリストの「復活の生命」)を生きる

2023年4月16日 「永遠の生命」を生きる

2023年4月23日 「廣大無辺なる福音」

2023年4月30日 「心安かれ、我なり、懼るな」「平安、汝らに在れ」

2023年5月14日 「ヨハネ伝17章の『主の祈り』(再論)」

2023年5月21日 「どん底に立ちて担い給う主キリスト」

2023年5月28日 「聖霊降臨記念日を迎えて」

2023年6月4日 「まず、神の国と神の義とを求めよ！」

2023年6月18日 「御言葉と偕なる生活(その2)」

2023年6月25日 「御言葉と偕なる生活(その3)」

2023年7月2日 「わが生(人生)の原点」

2023年9月10日 「神讃美・キリスト讃美に徹する」

2023年9月17日 「天国人らしく生きる！」

2023年9月24日 「艱難を乗り越える」

2023年10月1日 「『聖意現成・聖意体現』の祈りに生きる！」

2023年10月8日 「我活くれば汝らも活くべければなり」

2023年10月15日 「愛は寛容にして慈悲あり、信じ抜き望み抜き耐え抜き」

2023年10月22日 「その力、汝(神・キリスト)に在り、

その心、シオンの大路に在る者は恵福なり」

2023年11月5日 「神は我らの避け所また力、悩める時のいと近き助けなり」

2023年11月12日 「汝ら、心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ」

2023年11月19日 「詩篇第139篇と第103篇」

2023年11月26日 「七転八起の人生」

2023年12月17日 「世の光」なるキリスト(ヨハネ伝)



君は葡萄樹 我らその枝 (ヨハネ伝15章)

2023年1月8日

「我に居れ、さらば我 汝らに居らん。枝もし樹^きに居らずば、自ら果^みを結ぶこと能はぬごとく、汝らも我に居らずば亦然り。我は葡萄の樹、汝らは枝なり。人もし我に居り、我また彼に居らば、多くの果を結ぶべし。汝ら我を離るれば、何事をも為し能はず。人もし我に居らずば、枝のごとく外に棄てられて枯る、人々これを集め火に投げ入れて焼くなり。汝等もし我に居り、わが言 汝らに居らば、何にても望みに随^{したが}ひて求めよ、さらば成らん。汝ら多くの果を結ばば、わが父は栄光を受け給ふべし、而して汝等わが弟子とならん。父の我を愛し給ひし如く、我も汝らを愛したり、我が愛に居れ。(中略)

わが戒めは是なり、わが汝らを愛せし如く互いに相愛せよ。人その友のために己の生命を棄つる、之より大なる愛は無し。汝等もし我が命ずる事を行はば、我が友なり。(中略)

汝ら我を選びしにあらず、我 汝らを選び。而して汝らの往きて果を結び、且つその果の残らんために、又おほよそ我が名によりて父に求むるものを、父の賜はんために汝らを立てたり。これらの事を命ずるは、汝らの互いに相愛せん為なり。」(15章4〜17節)

主イエスが弟子たちとの別れに際して語られた「訣別遺訓」の中から、その一部を引用しました。主イエスが地上のご生涯において、父なる神に絶対的に(100%)依存して生き抜かれたように、私達も、主キリストに委ね切つて生きるとき、その人生は真に豊かな実を結ぶことが示されています。主イエスの歩まれた道は、「十字架道」でした。そして、私達に「永遠の生命」を与えてくださいました。主は、

「我なんじらを遺^{のこ}して孤児^{みなしご}とはせず、汝らに来るなり。われ活くれば汝らも活くべければなり。」(ヨハネ伝14章16節以下)

と語られ、聖霊(御霊のキリスト)として私達と共に居てくださることを約束してくださっています。この主キリストのご愛に応える讃歌が、小池先生の「君は葡萄樹」(1977年作)で、以下に引用致します。

- | | | | | |
|---|---------|-------------------------|---------|---------|
| 1 | 君は葡萄樹 | われらその枝 | いのちの君に | 連なりあれば |
| | つねに緑し | 枯るるを知らず | 花咲き香り | ゆたかに実る |
| 2 | 祈りて在れば | み霊の光 | わが身にそそぎ | 力は来たり |
| | 愛の燈火 | 心に点り | われを貫き | み業は進む |
| 3 | 「わが葡萄園 | わが召 ^{エクレシヤ} 団! | みたまの力 | いのりに受けよ |
| | 十字架を負いて | われに従え! | 使徒の昔を | 今とし生きよ |
| 4 | わが主イエスよ | われらの幹よ | み霊の愛に | われらは生きん |
| | 大和島根に | 若枝を伸ばし | 葡萄の房を | 頒ちて与えん |

私達にとって心強いのは、「汝ら我を選びしにあらず、我 汝らを選び」との御言葉です。主が私達をお選びになった以上は、必ず私達を護り、導き、支えて、ふさわしい在り方と為すべき業へと導いてくださるものと確信することが出来るからです。



「主の祈り」を「我が祈り」とする

2023年1月15日

「主の祈り」は、マタイ伝では、

「天にいます我らの父よ、願はくは

- ① 御名の崇められん事を。
- ② 御国の来らん事を。
- ③ 御意の天のごとく地にも行はれん事を。
- ④ 我らの日用の糧を今日も与へ給へ。
- ⑤ 我らに負債ある者を我らの免したる如く、我らの負債をも免し給へ。
- ⑥ 我らを試みに遭はせず、悪より救ひ出し給へ。」（6章9～13節）

とあり、ルカ伝では、

「父よ、願はくは

- ① 御名の崇められん事を。
- ② 御国の来らん事を。
- ③ 我らの日用の糧を日毎に与へ給へ。
- ④ 我らに負債ある凡ての者を我ら免せば、我らの罪をも免し給へ。
- ⑤ 我らを試みに遭はせ給ふな」（11章2～4節）

と記されている。両者を比べてみると、①②は共通であり、マタイ伝の③はルカ伝には無く、マタイ伝の④（日用の糧）は、ルカ伝では③である。マタイ伝の⑤（負債の免除）は、ルカ伝では④である。マタイ伝の⑥は、ルカ伝では⑤である。こうして比べてみると、マタイ伝の③のほかは、両者は共通である。ただ、私（奥田）の感覚としては、マタイ伝の③がルカ伝では無いというだけで、ルカ伝の祈りの方が、庶民的な感じがして、親しみやすいように思う。それでは、我々は、マタイ、ルカに共通の、①②を本当に祈れるのであろうか？「本当に」というのは、自分たちの状況が「どういう状況・状態であつても」である。順境にある時は祈れるが、逆境にある時、それも、自分に何の落ち度も無いのに、自分や肉親が突然に不幸な事態に遭遇したような場合（ヨブ記に記されている様々な不幸）にもなお、御名を崇め、御名に感謝し、讃美することができらるだろうか？

私（奥田）は、「どれほど恵みを受けてきたか」その一点にかかっていると思っている。「この御恩は、どんな事があつても、一生忘れません」というほどの「御恩」を神（主キリスト）から頂いたと感じているか、にかかっていると思つてゐる。私にとつては、主キリストが「十字架上の死」をもつて、私の「全存在」を贖つてくださったこと、そして、新しい「霊的生命（永遠の命）」を賜つたこと、パウロの告白の通りである。

「我キリストと偕に十字架につけられたり。最早われ生くるにあらず、（御霊の）キリスト我が内に在りて生くるなり。今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を捨て給ひし神の子を信するに由りて生くるなり。」

そして、日々、身親しく、絶対愛をもつて導き、生かしめてくださっていること、「この御恩は生涯、忘れることは出来ません」と告白するほかはない。なお、ルカ伝7章36～50節の、「多く赦された者は、多く愛する」を参照されたい。



我は生命のパンなり、我を食らい、我を飲め

——ヨハネ伝4章・6章・10章・14章——

聖句

2023年1月22日

① 『すべて此の水を飲む者は、また渴かん。されど我が与ふる水を飲む者は、永遠に渴くことなし。わが与ふる水は彼の中にて泉となり、永遠の生命の水湧き出づべし。』(ヨハネ伝4章13・14節)

② 『我は生命のパンなり。我に來たる者は飢えず、我を信する者はいつまでも渴くことなからん。』(ヨハネ伝6章35節)

③ 『わが父の御意は、すべて子を見て信する者の永遠の生命を得る是なり。我終の日にこれを甦へらすべし。』(同6章40節)

④ 『我は天より降りし活けるパンなり、人このパンを食らばば永遠に活くべし。我が与ふるパンは我が肉なり、世の生命のために之を与へん。』(同6章51節)

⑤ 『イエス言ひ給ふ『まことに誠に汝らに告ぐ、人の子の肉を食らはず、その血を飲まずば、汝らに生命なし。我が肉を食らひ、我が血を飲む者は、永遠の生命を持つ、われ終の日にこれを甦へらすべし。それ我が肉は眞の食物、わが血は眞の飲物なり。我が肉を食らひ我が血を飲む者は、我に居り、我もまた彼に居る。活ける父の我を遣はし、我の父によりて活くるごとく、我を食らふ者も我によりて活くべし。(中略)此のパンを食らふ者は永遠に活きん。』(同6章53・58節)

⑥ 『イエス言ひ給ふ『我が來たるは羊に生命を得しめかつ豊かに得しめん為なり。我は善き牧者なり、善き牧者は羊のために生命を捨つ。』(同10章10・11節)

⑦ 『イエス答へ給ふ『我が羊は我が声を聞き、我は彼らを知り、彼らは我に従ふ。我彼らに永遠の生命を与ふれば、彼らは永遠に亡ぶることなく、又彼らを我が手より奪ふ者あらじ。彼らを我に与へ給ひし我が父は、一切のものよりも大なれば、誰にても父の御手よりは奪ふこと能はず。我と父とは一つなり。』(同10章27・30節)

⑧ 『我汝らを遣して孤児とはせず、汝らに來たるなり。我活くれば汝らも活くべければなり。』(同14章18・19節)

以上、ヨハネ伝から主イエスの御言葉拾い上げましたが、わたしたちに「永遠の生命」を与えて、眞の生命を生きるようにと、ご自身が「道」となり、「眞」となり、「生命」となつてくださった主キリストと、「一如一体」となつて日々を生きることに、「我、キリストの内に、キリストわが内に」の生き方を貫くことが、主キリストの御愛にお応えする道だと信じます。御霊の主さまが、そのような願いにお応えくださることを信じて、どのような困難な事態や状況に遭遇しても、それを乗り越えて往きたいと、念願致します。



我は、そして汝らは、世の光なり

2023年1月29日

主キリストの語られた言葉から、

- ①『「我は世の光なり。我に従ふ者は暗き中を歩まず、生命の光を得べし」』（ヨハネ伝8章12節）
- ②『「なほ暫し光は汝らの中にあり、光のある間に歩みて、暗黒に追及かれぬやうにせよ、暗き中を歩む者は往方を知らず。光の子とならんために、光のある間に光を信ぜよ」』（ヨハネ伝12章35～36節）
- ③「イエス呼はりて言ひ給ふ『我を信する者は我を信するにあらず、我を遣し給ひし者を信じ、我を見る者は我を遣し給ひし者を見るなり。我は光として世に來れり、すべて我を信する者の暗黒に居らざらん為なり』」（ヨハネ伝12章44～46節）
- ④『「汝らは世の光なり。（中略）汝らの光を人の前に輝かせ。これ人の汝らが善き行為を見て、天にいます汝らの父を崇めん為なり。』」（マタイ伝5章14節、16節）
- ⑤『「身の燈火は目なり。この故に汝の目ただしくば、全身あかるからん。されど汝の目あしくば、全身くらからん。もし汝の内の光、闇ならば、その闇いかばかりぞや。』」（マタイ伝6章22～23節）

旧約聖書・詩篇から、

- ①「汝の聖言は我が足の燈火、我が路の光なり。」（119篇105節）
- ②「聖言うち披くれば光を放ちて、愚かなる者を慧からしむ。」（119篇130節）
- ③「主は我が光、我が救なり、主は我が生命の力なり」（27篇1節）

ヨハネ第一書より、

「我らが彼（キリスト）より聞きて、また汝らに告ぐる音信は是なり、即ち神は光にして少しの暗き所なし。もし神と交際ありと言ひて暗きうちを歩まば、我ら偽りて眞理を行はざるなり。もし神の光のうちに在すごとく光のうちに歩まば、我ら互に交際を得、また其の子イエスの血、すべての罪より我らを潔む。」（1章5～7節）

以上、主として新約聖書から「光」に関する主な聖句を掲げました。主キリストは、わたしたちが「世の光である」、「世の光であるように！」と宣言し、願ってくださっています。それが達成されるためには、主キリストご自身（御霊のキリスト）に宿って頂くほかに道はありません。主は十字架において贖罪の御業を果たし終えてくださいました。それを祈りの中で信受・体受して、

「我、主と共に十字架せられたり。最早、旧き我、生くるにあらず、（新しく賜りたる霊なる我）御霊のキリストに在りて生くるなり」

との自覚をもつて、歩むほかにありません。主ご自身がそれを願い、必ず達成してくださいます。



生命の御霊の法に生きる

2023年2月5日

「この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定められることなし。キリスト・イエスに在る生命の御霊の法は、なんじを罪と死との法より解放したればなり。」(ロマ8・1～2)

主イエス・キリストは私達が「永遠の生命者」となつて生きると願つてくださっています。

「我は復活なり、生命なり、我を信する者は死ぬとも生きん。凡そ生きて我を信する者は、永遠に死なざるべし。」(ヨハネ11・25～26)

と語られ、また、

「我、汝らを遺して孤児とはせず、汝らに來たるなり。暫くせば世は復我を見ず、されど汝らは我を見る、我活くれば汝らも活くべければなり。」(ヨハネ14・18～19)

と宣言してくださった主キリストは、ご復活の事態をもつて、ご自身が「天の次元」、神の臨在し給う「霊の次元」に生きる者(永遠の生命者)であることを示してくださいとともに、主キリストの「十字架上の死」を、「我々の罪を贖つての死」として、感謝して受け取る者には、ご自身と同質の「天の次元の生命、新しい永遠の生命」を与え、それを生きる者としてくださいました。コリント前書1章18節に、

「それ十字架の言は亡ぶる者には愚なれど、救はるる我らには神の能力なり。」とありますが、その趣旨は、

「主イエス・キリストが十字架上で死んでくださったという事態を、『我がための死』として感謝して受け取る者には、それ(主イエスの死)は、『神の能力であり、また、神の智慧である』」(同24・25節)

ことを表しています。新約聖書が伝えている事態は、「見える世界、見える事態」ではなく、それを超えた「見えない世界、天の次元の事態」です。キリストは、

「神は霊なれば、拝する者も霊と真とをもて拝すべきなり。」(ヨハネ4・24)

「活かすものは霊なり。肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、霊なり、

生命なり。」(同6・63)

と諭されて、私達が地上の生命を生きるときにも、それを超えた「真の生命、キリストの賜る新しい生命」に生きると諭し、そのための「道」となつてくださいました(ヨハネ14章6節)。このように、聖書が、そして主キリストや使徒パウロ達が指し示してくださいした事態は、「見える現実」を超えた「見えない、けれども現に存在する、天の次元、神・キリストのご臨在くださっている真の生命の世界」です。このような尊い「霊の事態、神の賜る恵みの事態」を頂いた私達は、それを証してゆく責務を賜っています。私達の地上での生命には限界があり、また、様々の試練に見舞われることがあります、それを乗り越えて、「生命の御霊の法」に導かれ、主の恵みを証してゆく日々でありたいと念願致します。

「我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御霊みづから言ひ難き嘆きをもて執り成し給ふ」(ロマ8・26)

に続く27節から39節の力強い励ましに支えられて、勝利の日々を歩みましょう！



終末的『愛』に生きる

2023年2月12日

福音書の記述に由れば、主イエス・キリストの宣教は、神の審判に近いという「終末」の迫りの中で行われた。主イエスに先立って現れた洗礼者ヨハネの宣教がそれを示している（マタイ伝3章1〜12節、マルコ伝1章1〜8節）。「終末の迫り」は、単に「この世の終わり」を意味するだけではなく、その先に「新天新地の到来」という希望を含んだものであった。それはまた、人の地上の人生の終末の後に、天界（天の次元）における「新しい生」が備えられているという希望を意味していた。「山上の垂訓」と呼ばれるマタイ伝5章〜7章も、この角度から理解されなければならない。また、最も大切な戒めは何かとの問答において、

「第一は是なり『イスラエルよ聴け、主なる我らの神は唯一の主なり。なんじ心を尽くし、精神を尽くし、思ひを尽くし、力を尽くして、主なる汝の神を愛すべし』第二は是なり『おのれの如く汝の隣を愛すべし』此の二つより大なる誠命はなし」

と、「神への愛」と「人への愛」に生きることが最高の価値ある、神の祝福を伴う生き方であることを示されたのも、そのような生き方こそが、この地上での生を超えて、天上界においても祝福を伴う真実の生き方であることを示されたのだと思う。ヨハネ伝13章1節には、

「過越のまつりの前に、イエスこの世を去りて父に往くべき己が時の来たれるを知り、世にある己の者を愛して、極みまで之を愛し給へり。」

と記されており、続く14章から16章において、「訣別遺訓」と呼ばれている「別れの言葉」が記述されている。使徒パウロがミレトにてエペソの長老たちを呼び寄せて語った「別れの言葉」（使徒行伝20章18節〜35節）も、私達の胸を打つ。主イエスの「訣別遺訓」にせよ、パウロの「別れの言葉」にせよ、いずれも「地上の生の終」に際して、最も大切な事を伝えて置きたいとの一念から語りだされた「愛の遺言」とも言うべき尊いものである。

「愛の讃歌」と呼ばれるコリント前書13章や、主キリストと父なる神の「愛」を讃えるヨハネ第一書3章〜5章は、私達の人生において、このような「愛」が最も尊いものであることを教えている。生来の私達には「自己保存本能」が備わっており、このような「高次元の愛」に生きることが、容易な事ではない。この困難を克服させてくれるのは、

「我、主と共に十字架に付けられたり。最早、『旧き我』生くるに非ず、主キリストより賜りたる『新しき我』、御霊に（御霊のキリストに）在りて、御霊に導かれて生くるなり」

と信じて、御霊の主キリストに委ねて生きるほかに道はない。「講筵題目」に「愛」に「終末的」との語を付して、「終末的『愛』に生きる」との題を掲げたのは、私達の誰もが「死」という「人生の終末」を免れることが出来ないという「はかない」人生において、「それにもかかわらず」死に負けない、死を突破して輝く生き方が可能であり、それを可能としてくださるのは、ご自身の十字架上での「死」を以って、私たちの「罪と死」を引き受け、それに打ち勝ってくださった主キリストを賜っているからである。



主キリストより賜る「希望」に生きる

2023年2月19日

使徒パウロは、ロマ書5章1～5節において、私たちは主キリストにより、

「いま立っているこの恵みに信仰によって導き入れられ、そして、神の栄光にあずかる希望をもって喜んでい。それだけではなく、患難をも喜んでい。なぜなら、患難は忍耐を生み出し、忍耐は練達を生み出し、練達は希望を生み出すことを、知っているからである。そして、希望は失望に終ることはない。なぜなら、わたしたちに賜わっている聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからである。」

と述べている。「神の栄光にあずかる希望」「練達は希望を生み出す」「希望は失望に終ることはない」と、何と力強い言葉でしょうか！ 私達はさまざまな願望を持ちます。その「願望」が、ここで述べられている「希望」に変わるためには、その願望が、神・キリストの「御心」にかなうものであることが必要です。ということとは、その「願望」が「神・キリストから賜わったもの」であることが必要です。ヘブル書11章1節に、

「信仰とは、望んでいる事がらを確信し、まだ見ていない事実を確認することである。」

とありますが、「望んでいる事がら」とは、「神・キリストの御心になつて望んでいる事がら」「新約聖書において約束されている事がら」であることが大切です。それと共に、「望んでいる事がら」は必ず成就する、実現する、との「信」が大切です。コリント前書13章に、

「いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛と、この三つである」

とありますが、「希望」は「信仰」によって支えられていることが大切です。私達は、この地上の人生において、また、日々の生活の中で、様々な困難や試練に直面いたします。そんな時、支えとなるのは、

「あなたがたは、この世では、なやみ（患難）がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」（ヨハネ伝16章33節）

との主キリストの言葉や、

「あなたがたの会った試練で、世の常でないものはない。神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に会わせることはないばかりか、試練と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えてくださるのである。」（コ

リント前書10章13節）

とのパウロの言葉、また、

「わたしたちは、この宝を土の器の中に持っている。その測り知れない力は神のものであつて、わたしたちから出たものでないことが、あらわれるためである。わたしたちは、四方から患難を受けても窮しない。途方にくれても行き詰まらない。迫害に会っても見捨てられない。倒されても滅びない。いつもイエスの死をこの身に負っている。それはまた、イエスのいのちが、わたしたちの死ぬべき肉体に現れるためである。」（コリント後書4章7～11節）

とのパウロの言葉に励まされながら、希望をもって、日々を過ごしたく願います。



霊に燃え、祈りを恒（常）にし——ロマ書12章11～12節——

2023年2月26日

ロマ書12章では、集会や日常生活の在り方についての指針が記されています。その中から、特に11～12節、

「心を熱くし、主につかへ、望みて喜び、患難に耐へ、祈りを恒にし」
の箇所、口語訳では、

「熱心で、うむことなく、霊に燃え、主に仕え、望みをいだいて喜び、患難に耐え、常に祈りなさい。」

を取り上げること致します。文語訳での「心を熱くし、……祈りを恒にし」が、口語訳では「熱心で、うむことなく、霊に燃え、常に祈りなさい」となっています。手元にあるドイツ語訳聖書では、

「霊において燃えてあれ、……祈りを恒にせよ」
(Seid brennend im Geist. haltet an am Gebet.)

となっています。このように比較してみると、口語訳の方が「原文」に近いのではないかと思います。私が共感するのは、「霊において、燃えてあれ！」との奨めです。

「霊において（霊が）燃えている状態での祈り」

でなければ、天に届かないと思います。付言しますと、「祈り」は、自己の願望を開陳するのではなく、先ずは「神・キリストの聖名を讃え、御恵みに感謝する」ことから始めるべきものと思います。「主の祈り」も「天にいます我らの父よ、御名が崇められますように」で始まっています。有難いことに、

「あなたがたの父なる神は、求めない先から、あなたがたに必要なものはご存じなのである」（マタイ伝6章8節）。

だから、

「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられる」（同33節）

と約束されています。ところで、「霊において、燃えている」状態は、どうすれば私達において実現するのでしょうか？ それを保ち続けることは大変難しいことではないでしょうか？ それにつき、私は、「生来の自分（肉）なる自分」ではダメだけれども、「主イエスの十字架に由る贖罪（罪の贖いと赦し）を賜った自分（新生の「霊」なる自分）」ならば、主キリストの御霊の助けを頂いて、日々、主と共に歩む生活において実現可能だと思っています。ガラテヤ書2章20節の使徒パウロの告白を「わが告白」として生きるならば、それが成就しています。主キリストは、私たちのために必要な事を、全て成し遂げて天界へと飛翔されました。そして、「助け主・御霊のキリスト」の姿（相）で、いつも、傍近くご臨在くださっています。主キリストは、弟子たちに対して、

「あなたがたが私を選んだのではない。私があなたがたを選んだのである。そして、あなたがたを立てた。」（ヨハネ伝15章16節）

と語っておられます。主が選び、立て給うた以上は、必ず実を結ばせてくださる、そして、それが神・キリストの栄光の顕れとなります。「実を結ぶ」とは、何か立派な事を為し遂げ、それをさすのではなく、どんな境遇においても、主キリストに感謝し、御名を讃えて生きることを指しています。そのような人生こそが、「主にある尊い人生であり、主の喜び給う人生である」と確信しています。



別れに当たって

——ヨハネ伝13章～17章、使徒行伝20章——

2023年3月5日

地上に生を受けた私達には、必ず、別離の時が訪れます。それが何時であるかは誰も知ることが出来ません。それだけに、私達は、常に「いつ、何があつても!」との気持ちを抱いていることが大切です。ということは、対人関係においても、「現在」を大切にすることが必要です。「あの時、ああしておけばよかった!」と後悔することがないためにも、「現在、誠実に、できる限りの事をしておく」との心構えが肝要かと思えます。

ヨハネ伝13章1節には、

「過越しの祭の前に、イエスは、この世を去って父のもとに行くべき自分の時が来たことを知り、世にいる自分の者たちを愛して、彼らを最後まで愛し通された。」

と記されています。そして、弟子たちの足を洗い、

「主であり、また教師である私が、あなたがたの足を洗ったからには、あなたがたもまた、互いに足を洗い合うべきである」

と諭され、ご自身が世を去った後の弟子たちの「在り方」の指針を示されました。そして、14章から16章までが「別れの言葉」(訣別遺訓)、17章は「最後の祈り」(大祭司の祈り)と続きます。この17章の「祈り」を読めば、主キリストが如何に自分亡き後の弟子たちの事を慮おもひつておられるかが、よくわかります。しかも、私が強調したいのは、ここに記されている「別れ」は、ただの「別れ」ではなく、これから「十字架」という過酷な定めを受け入れなければならない、それも、父なる神への「信・義・愛」を貫いて生きられたイエスにとつて、全く不条理としか言いようのない事態を前にしての「別れ」であり、「祈り」であるということです。他方、使徒行伝20章17節以下には、使徒パウロがミレトからエペソに使いをやつて、教会の長老たちを呼び寄せて語った言葉が記されています。その中で、パウロが去ったあと、教会を荒らす者たちが現れることに注意し、

「私が3年の間、夜も昼も涙をもって、あなたがたひとりびとりを絶えず諭して来たことを、忘れないでほしい。今わたしは、主とその恵みの言とに、あなたがたを委ねる。御言には、あなたがたの徳を建て、聖別されたすべての人々と共に、御国をつがせる力がある。私は、人の金や銀や衣服を欲しがったことはない。……私のこの両手は、自分の生活のためにも、また一緒にいた人たちのためにも、働いてきたのだ。私は、あなたがたもこのように働いて、弱い者を助けなければならないことを、また『受けるよりは与える方が、さしいわいである』と言われた主イエスの言葉を記憶しているべきことを、万事について教えたのである。」

と切々と語っています。テモテ後書4章6～8節では、

「戦いを立派に戦い抜き、信仰を守り通した。今や、義の冠かんむりが私を待っている」と勝利を宣言しています。



神讚美・キリスト讚美の人生を！

2023年3月12日

いつだったか、小池先生が、

「人生の目的は、神讚美である。」（神・キリストを讚美することが人生の目的である。）と語られた。

旧約聖書の「詩篇」には、神を讚美する詩が多く含まれている。例えば、19篇、33篇、34篇、103篇、139篇を挙げることが出来るよう。

新約聖書からは、ペテロの第一の手紙1章3～9節を挙げたい。

「³讚むべきかな、我らの主イエス・キリストの父なる神、その大なる憐憫に随ひ、イエス・キリストの死人の中より甦へり給へることに由り、我らを新に生れしめて生ける望を懷かせ、⁴汝らの為に天に蓄へある、朽ちず汚れず萎まざる嗣業を継がしめ給へり。⁵汝らは終のときに顕れんとて備りたる救を得んために、信仰によりて神の力に護らるるなり。⁶この故に汝ら今しばしの程さまさまの試煉によりて憂へざるを得ずとも、なほ大に喜べり。⁷汝らの信仰の験は、壊つる金の火にためさるるよりも貴くして、イエス・キリストの現れ給ふとき誉と光栄と尊貴とを得べきなり。⁸汝らイエスを見しことなけれど之を愛し、今見ざれども之を信じて、言ひがたく、かつ光栄ある喜びをもて喜ぶ。⁹これ信仰の極、すなはち靈魂の救を受くるに因る。」（ペテロ一1：3～9）

なお、私にとって神讚美の源は、ヨハネ伝福音書3章16節、

「¹⁶それ神はその独子を賜ふほどに世を愛し給へり、すべて彼を信する者の亡びずして、永遠の生命を得んためなり。」（ヨハネ3：16）

及びヨハネの第一の手紙3章16節、

「¹⁶主は我らの為に生命を捨てたまへり、之によりて愛といふことを知りたり、我等もまた兄弟のために生命を捨つべきなり。」（ヨハネ一3：16）

であり、神・キリスト讚美に生きる者は、使徒パウロと共に、コリント人への第二の手紙4章、5章を「我が告白」として貫く者である。



我は生命のパンなり。我を食らひ我が血を飲め

2023年3月26日

(ヨハネ伝第6章)

「イエス言ひ給ふ。『我が父は天よりの眞のパンを与へたまふ。神のパンは天より降りて生命を世に与ふるものなり。我は生命のパンなり、我に来る者は飢えず、我を信する者はいつまでも渴くことなからん。』」

『父の我に賜ふ者は皆我に来らん。我に来る者は我これを退けず、我が天より降りしは、我が意をなさん為に非ず、我を遣し給ひし者の御意をなさん為なり。我を遣し給ひし者の御意は。すべて我に賜ひし者を、我その一つをも失はずして、終りの日に甦へらする是なり。我が父の御意は、すべて子を見て信する者の永遠の生命を得る是なり。我終りの日にこれを甦へらすべし。』

『信する者は永遠の生命を持つ。我は生命のパンなり。我は天より降りし活けるパンなり、人このパンを食らば永遠に活くべし。我が与ふるパンは我が肉なり、世の生命のために之を与へん。』

『人の子の肉を食らはず、その血を飲まずば、汝らに生命なし。わが肉を食らひ我が血を飲む者は、永遠の生命を持つ、われ終りの日にこれを甦へらすべし。それ我が肉は眞の食物、我が血は眞の飲物なり。我が肉を食らひ我が血を飲む者は、我に居り、我もまた彼に居る。活ける父の我を遣はし、我の父に由りて生くるごとく、我を食らふ者も我によりて活くべし。このパンを食らふ者は永遠に活きん。』

『活かすものは霊なり、肉は益する所なし、我が汝らに語りし言は、霊なり、生命なり。』

主イエスは、私達に、肉体の生命を超えた「霊的生命(永遠の生命)」を与えようとして天界より地上界に降臨してくださいました。そして、そのために必要な事を悉く為し遂げてくださいました。そして、今は「御霊のキリスト」として、一人一人の中に宿って命付け、護り、導いてくださっています。そして、

「我を食らい、我が血を飲め」

と日ごとに生命の言葉を以って養ってくださいています。このように「御霊の命」を頂いている私達たちは、たとえ、

「外なる人は壊れても、内なる人は日々新たななり」

の気概をもって主を讃美する日々でありたいと願っています。前回に取り上げた詩篇103篇の「感謝と讃美」をもって貫きたいと願います。



『御復活記念の日』を迎えるに当たって

2023年4月2日

聖句(1)

「一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん、もし死なば、多くの実を結ぶべし。己が生命を愛する者は、これを失ひ、この世にてその生命を憎む者は、之を保ちて永遠の生命に至るべし。人もし我に仕へんせば、我に従へ、わが居る処に我に仕ふる者もまた居るべし。人もし我に仕ふることをせば、我が父これを貴び給はん。」(ヨハネ伝12章24〜26節)

聖句(2)

「我は復活なり、生命なり、我を信する者は死ぬとも生きん。凡そ生きて我を信する者は、永遠に死なざるべし。汝これを信するか」(ヨハネ伝11章25〜26節)

我々の肉体的生命は、さまざまの障害や危険を回避しながら、ないしは戦いながら、その生命を保持し続けています。その間に我々は、肉体的生命を超えた「霊的生命(永遠の生命)」を信受・体受しておかなければなりません。主イエス・キリストは、正にその「霊的生命(永遠の生命)」を与えようとして天界より降臨してくださいました。テモテ後書1章9〜10節には、

「神は我らを救ひ聖なる召しをもて召し給へり。是われらの行為おこないに由るにあらず、神の御旨みむねにて創世の前にキリスト・イエスをもて我らに賜ひし恩恵めぐみに由るなり。この恩恵は今われらの救主キリスト・イエスの現れ給ふに因りて顕れたり。彼は死をほろぼし、福音をもて生命と朽ちざる事とを明らかにし給へり。」

と高らかに勝利宣言が発せられています。

同様に、ロマ書8章31節〜39節の凱歌も主キリストによる神の愛の勝利を高らかに謳っています。私達は現実の生活においては、様々な困難や障害に出会い、また、これを受け入れて不如意ふによいな日々を送らねばならないことも珍しくはありませんが、「見ゆる処」がどのようなものであっても、なお、ロマ書26節〜39節の

「主キリストによる、神・キリストの愛の勝利」

を確信して生き抜きたいと念願致します。



「永遠の生命」(キリストの「復活の生命」)を生きる

――復活節に賜わる神・キリストからの贈物――

2023年4月9日

聖句

「我は復活(甦り)なり、生命なり、我を信する者は死ぬとも生きん。凡そ生きて我を信する者は、永遠に死なざるべし。汝これを信するか」(ヨハネ伝11章25〜26節)

要旨Ⅰ 受難日の出来事

- (1) ゲッセマネの祈り
マタイ伝26章36〜46節
マルコ伝14章32〜42節
ルカ伝22章39〜46節
- (2) 十字架上での祈り
マタイ伝27章45〜50節
マルコ伝15章33〜37節
ルカ伝23章33〜46節

Ⅱ 甦り給いし主キリスト

- (1) マタイ伝28章
エマオ途上のキリスト
- (2) ルカ伝24章
「マリヤよ」「ラボニ」
- (3) ヨハネ伝20章
「平安なんじらに在れ」
「聖霊を受けよ」

「見ずして信する者は幸福なり」

Ⅲ 我らの中に今も生きて在り給う御霊のキリスト

冒頭に掲げた聖句のとおり、私達に「永遠の生命」を賜い、肉体の生命を超えた「霊的生命(永遠の生命)」に生きる者としてくださった「この恵みの事態」を全存在的に信受・体受して、それを実証し、かつ、人々に分かち与える存在として用いていただくこと、ここに私たちの使命と喜びがあることを確信して、感謝と讃美の日々を過ごしたく願います。

「汝らキリストと共に甦らせられし故に、上にあるものを求めよ、キリスト彼処にありて神の右に坐し給うなり。汝ら上にあるものを思い、地にあるものを思うな。汝らは死にたる者にして、其の生命はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり。我らの生命なるキリストの現れ給うとき、汝らも之とともに栄光のうちに現れん。」(コロサイ書3章1〜4節)



「永遠の生命」を生きる

2023年4月16日

ヨハネ伝14章19節に

『われ活くれば汝らも活くべければなり。』

との主キリストの御言葉が記されています。主キリストは私達に「死んでも死なない命（永遠の生命）」を約束してくださいました。主キリストはマルタ、マリヤの両姉妹に対して、

『我は復活なり、生命なり、我を信する者は死ぬとも生きん。凡そ生きて我を信する者は、永遠に死なざるべし。汝これを信するか』

と尋ねておられます。この問いかけは、実は我々一人びとりに対しての問いかけです。

私は、この問いかけに対して、全存在をもって、「はい、感謝してお受けいたします」とお答えいたします。テモテ後書1章に、

「神は我らを救ひ聖なる召しをもて召し給へり。是われらの行為に由るにあらず、神の御旨にて創世の前にキリスト・イエスをもて我らに賜ひし恩恵に由るなり。この恩恵は今われらの救主キリスト・イエスの現れ給ふに由りて顕れたり。彼は死を滅ぼし、福音をもて生命と朽ちざる事とを明らかにし給へり。」（9～10節）

と記されています。

主キリストに出会っていただく前の自分にとって、「死」は「一切の否定」として重くのしかかり、「現在」を充実して生きることが許しませんでした。それ故に、主キリストがご自身の十字架上の死をもって「死を滅ぼしてください」と、ご復活の事実をもって「生命と朽ちざる事」とを明らかにしてくださいしたことは、本当に有難いことだと感謝しております。主キリストは、

「神は霊なれば、拝する者も霊と眞とをもて拝すべきなり。」（ヨハネ伝4章24節）

「活かすものは霊なり、肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、霊なり、生命なり。」（ヨハネ伝6章63節）

の御言葉をもつて、私たちは、肉体を宿としている間に、真の「霊的生命」を信受・体受して、「永遠の生命」を生きるようにと、論してくださっています。

私が有難く嬉しく思うことは、主キリストが、初めに掲げたように、

「われ活くれば汝らも活くべければなり。」

「お前と一緒に生きるのだよ、いつも一緒に生きよう！」

と呼び掛けていてくださることです。人間は誰でも、年齢を重ねるごとに衰えていきます。しかしながら、コリント後書4章16～18節にあるように、

「内なる人は日々に新」

なる思いで、御名を讃えつつ生きてゆきたいものと願っています。



広大無辺なる福音（イザヤ書 43 章～ 49 章より）

2023年4月23日

今回は久しぶりにイザヤ書後半部（第二イザヤと呼ばれている部分）に雄飛してみたいと思います。

① 43 章 1～7 節より

「ヤコブよ、あなたを創造された主はこう言われる。『恐れるな、わたしはあなたをあがなつた。わたしはあなたの名を呼んだ、あなたはわたしのものだ。あなたが水の中を過ぎるとき、わたしはあなたと共にいる。川の中を過ぎるとき、水はあなたの上にあふれることがない。あなたが火の中を行くとき、焼かれることもなく、炎もあなたに燃えつくことがない。わたしはあなたの神、主である。イスラエルの聖者、あなたの救主である。（中略）すべてわが名をもつてとなえられる者をこさせよ。わたしは彼らをわが栄光のために創造し、これを造り、これを仕立てた。』」

② 43 章 21 節

「この民は、わが誉れを述べさせるために、わたしが自分のために造つたものである。」

同 25 節

「わたしこそ、わたし自身のために、あなたのとがを消す者である。わたしは、あなたの罪を心にとめない。」

③ 44 章 21～23 節

「ヤコブよ、イスラエルよ、これらの事を心にとめよ。あなたはわがしもべだから。わたしはあなたを造つた。イスラエルよ、わたしはあなたを忘れない。わたしはあなたのとがを雲のように吹き払い、あなたの罪を霧のように消した。わたしに立ち返れ、わたしはあなたをあがなつたから。天よ、歌え、主がこの事をなされたから。地の深き所よ、呼ばわれ。もろもろの山よ、林およびその中のもろもろの木よ、声を放って歌え。主はヤコブをあがない、イスラエルのうちに栄光をあらわされたから。」

④ 46 章 3～4 節

「ヤコブの家よ、イスラエルの家の残つたすべての者よ、生れ出た時から、わたしに負われ、胎を出した時から、わたしに持ち運ばれた者よ、わたしに聞け。わたしはあなたがたの年老いるまで変らず、白髪となるまで、あなたがたを持ち運ぶ。わたしは造つたゆえ、必ず負い、持ち運び、かつ救う。」

⑤ 49 章 8～13 節

「主はこう言われる、『わたしは恵みの時に、あなたに答え、救の日にあなたを助けた。わたしはあなたを守り、あなたを与えて民の契約とし、国を興し、荒れすたれた地を嗣業として継がせる。（以下、略）天よ、歌え。地よ、喜べ。もろもろの山よ、声を放って歌え。主はその民を慰め、その苦しむ者をあわれまれるからだ。』」

以上に掲げられている「恵み、救い」の事態は、主イエス・キリストによつて実現されることとなりますが、この「恵み、救い」を預言するにあたって、「天よ、歌え、地よ、喜べ。」（49 章 13 節、44 章 23 節）と、大自然に向かって、「喜び、感謝、讃美」の思いを吐露しないではいられない姿に感動いたします。



「心安かれ、我なり、懼るな」「平安、汝らに在れ」

2023年4月30日

使徒ペテロは、その「第一の手紙」の冒頭において、各地に離散しているキリスト信徒に対して、

「あなた方は信仰により神の御力に守られている。様々の試練の中でも大いに喜んでゐる。イエス・キリストを見たことはないが、彼を愛している。現在、見てはいないけれども、信じて、言葉に尽くせない、輝きに満ちた喜びに溢れている。それは、信仰の結果なる魂の救いを得ているからである。」

と述べています（5～9節の要約）。これは、現代の私達についても、その通りではないでしょうか。福音書に記述された主キリストの言・行に接していますと、御霊の主キリストさまが、「今も、あなたを守っているから、大丈夫だ。安心しなさい！」と語りかけてくださっているように感じます。

福音書に描かれた、湖上での主イエスと弟子達の関わりの二つの場面を取り上げてみます。一つは、主イエスと弟子たちとが一緒にいる場面、もう一つは一緒にいない場面です。

前者は、湖上で突然の嵐に見舞われたときの主イエスと弟子たち（マタイ伝8章23～27節、マルコ伝4章35～41節、ルカ伝8章22～25節）、後者は弟子たちだけが湖上にあつて難渋している場面（マタイ伝14章22～33節、マルコ伝6章45～52節、ヨハネ伝6章16～21節）です。前者については、主イエスが一緒に居られるのに何故心配するのか、と尋ねたくなりますが、私たちの日常生活においても、「御霊の主キリストが常に共に居て、護つてくださっているのに、何故、心配するの？」と自らに問いかけたい場面が屢々しばしばではないでしょうか？ 後者については、現象的には、主キリストのお姿は見えないので、心細くなるかもしれませんが、ペテロ第一の手紙にあるように、「信仰により神・キリストの御力により守られている」点では同じですから、結局は、「いつ、いかなる状況においても、御霊の主キリストの御護りは貫徹している」と信ずるべきです。「平安、汝らに在れ」は、復活された主イエスが弟子たちのところに現れて語りかけられた御言葉です（ヨハネ伝20章19節）。

福音書によりますと、復活された主イエスは、ご自身の方から弟子たちに近づき、声をかけ、励ましておられます（ルカ伝24章のエマオ村へと旅立つて歩む二人の弟子に現れて語りかけられた復活の主キリスト）。

「我、汝らを遺のこして孤児みなしごとはせず、汝らに來たるなり。われ活くれば汝らも活くべければなり。」

と約束してくださった主キリストは、常に私達と共に居てくださっています。現代の私たちの地上での生活は、様々の危険にさらされていると言えるでしょう。それにもかかわらず、なお、私達には「力ある御霊の主キリストの御護り」があります。そのことを信じて、感謝と讃美の勝利の日々を送りたく願います。



二つの『主の祈り』に生きる

2023年5月7日

「主の祈り」と言えば、一般には、マタイ伝6章9節以下に掲げられている祈り、即ち、

「天にいます我らの父よ、願はくは御名の崇められん事を。御国の来らんことを。御意の天のごとく地にも行はれん事を。我らの日用の糧を今日もあたへ給へ。我らに負債ある者を我らの免したる如く、我らの負債をも免し給へ。我らを試練に遇はせず、悪より救ひ出したまへ。」

を指しています。私（奥田）は、これに加えて、ヨハネ伝17章に掲げられた主イエス・キリストの「祈り」をも「主の祈り」として受け取りたいと思っています。

先に掲げた「主の祈り」は、いわゆる「山上の垂訓」の中で示されているもので、主イエスの伝道の初期に教えられた祈りだと推察いたします。これに対し、ヨハネ伝17章の祈りは、主イエスが弟子たちとの別れ（十字架に架けられるため）に当たって、残される弟子たちのことを思って祈ってくださった「執り成しの祈り」というべきものです。そして、こちらの方が、私たちにとって一層大切な「主の祈り」だと思っています。

ヨハネ伝3章16節には、

「それ神はその独子^{ひとりご}を賜ふほどに世を愛し給へり、すべて彼を信する者の亡びずして、永遠の生命を得んためなり。」

と記されていますが、この「永遠の生命」は、

「唯一の真の神にいます汝と、汝の遣はし給ひしイエス・キリストとを知るにあり。」

と主イエスが自身がヨハネ伝17章の祈りにおいて告白しておられます。その主イエスは、「我を見し者は父を見しなり。我は父に居り、父は我に居給ふなり。」

と語っておられます（ヨハネ伝14章11節）。そして、その主イエスが

「我なんじらを遣して孤児とはせず、汝らに來たるなり。」

「われ活くれば汝らも活くべければなり。その日には、我わが父に居り、汝ら

我に居り、われ汝らに居ることを汝ら知らん。」（14章18～20節）

と、

「唯一の真の神と、神の遣はし給ひしイエス・キリストとを知ること」

によって「永遠の生命」を賜ること自体が、主イエス・キリストの恵みの御業であることが示されています。

人は誰でも、高齢に達すると、たとえ「内なる人」は「日々新たに」であつても、「外なる人」は、破れて参ります。そのような状況においても、感謝と讃美の日々を過ごすことが、ヨハネ伝17章の「主の執り成しの祈り」に應える道ではないかと思っています。



ヨハネ伝17章の『主の祈り』(再論)

2023年5月14日

ヨハネ伝17章の「主の祈り」の背景は同13章の冒頭に見ることが出来ます。そこでは、

「過越しの祭りの前に、イエスこの世を去りて父に往くべき己が時の来れるを知り、世に在る己の者を愛して、^{きわみ}極まで之を愛し給へり。」

と記されています。即ち、主イエスは、共に過ごした弟子たちとの別れが迫っていることを悟って、彼らを「極まで」愛し給うと共に、弟子たちの足を洗われた後に、彼らに語られた言葉が、まず、13章12〜20節、31〜35節に記されています。その要点は、

「互いに愛し合うべきこと」

でした。次いで14章から16章では、「訣別遺訓」と呼ばれている「別れの言葉」が記されています。続く17章では、「大祭司の祈り」と呼ばれている最後の祈りが記されています。この祈りにおいて、ご自身が父なる神より賜った使命を忠実に果たしてきたこと、父の御許に召された後に、残された弟子たちを御名の中に守って頂きたいこと、彼らが「一つ」となって、一致団結して伝道の使命を果たすべきことを切々と祈ってくださっています。

ここで思うことは、人は世を去るに当たって、後に残る者たちの将来を思い、

「どのように生きて欲しいか、そして、それが実現するように」

と願い、祈るのではないか、ということ。私(奥田)個人の「祈りと願い」は、

① まずは、人生において、主キリストに出会って頂き、救いの恵みにあずかったことへの感謝と讃美。

② 召された後、京都キリスト召団が、御霊の主キリストの御導きと御護りの中で一致団結して力強く歩んでほしいこと、兄弟姉妹の一人一人が、信仰の道(キリスト道)を力強く歩んで欲しいこと。

であります。そのために欠かせないのは、

「集会に祈りの火が燃えていること」

で、それには、各自の日常生活において、

「人を活かすものは『霊』であって、『肉』は役立たない。私(主イエス)が語った言葉は、『霊』であり、『命』である」

との御言葉(ヨハネ伝6章63節)や、マタイ伝6章の主キリストの御言葉を身に体して「天国人」としての生き方を貫くことが大切だと思っています。

主イエスは、「小さき者」を愛し給います。ルカ伝12章32節に、

「^{おそ}懼るな、小さき群れよ、汝らに御国^{みくに}を賜ふことは、汝らの父の御意なり。」

との力強い励ましの言葉があります。私達は、日々に「御言葉と御霊」に導かれつつ、御国への旅路を力強く歩んでゆきたいものと、願っています。



どん底に立ちて担い給う主キリスト（福音の原点）

2023年5月21日

聖句

① イザヤ書46章3～4節

「ヤコブの家よ、イスラエルの家の残ったすべての者よ、生れ出た時から、わたしに負われ、胎を出した時から、わたしに持ち運ばれた者よ、わたしに聞け。わたしはあなたがたの年老いるまで変らず、白髪となるまで、あなたがたを持ち運ぶ。わたしは造ったゆえ、必ず負い、持ち運び、かつ救う。」

② イザヤ書57章14～19節

「主は言われる、『土を盛り、土を盛って道を備えよ、わが民の道から、つまずく物を取り去れ』と。いと高く、いと上なる者、とこしえに住む者。その名を聖となえられる者がこう言われる。『わたしは高く、聖なる所に住み、また心碎けて、へりくだる者と共に住み、へりくだる者の霊を生かし、碎けたる者の心をいかす。わたしはかぎりなく争わない、また絶えず怒らない。霊はわたしから出、いのちの息はわたしがつくったからだ。彼のむさぼりの罪のゆえに、わたしは怒って彼を打ち、わが顔をかくして怒った。しかし彼はなおそむいて、おのが心の道へ行った。わたしは彼の道を見た。わたしは彼をいやし、また彼を導き、慰めをもって彼に報い、悲しめる者のために、くちびるの実を造ろう。遠い者にも近い者にも平安あれ、平安あれ、わたしは彼をいやそう』と主は言われる。」

③ 詩篇第130篇 都もうでの歌。

「主よ、わたしは深い淵からあなたに呼ばわる。主よ、どうか、わが声を聞き、あなたの耳をわが願いの声に傾けてください。主よ、あなたがもし、もろもろの不義に目をとめられるならば、主よ、だれが立つことができましょうか。しかしあなたには、ゆるしがあるので、人に畏れかしこまれるでしょう。わたしは主を待ち望みます、わが魂は待ち望みます。そのみ言葉によって、わたしは望みをいただきます。わが魂は夜回りが暁を待つにまさって主を待ち望みます。イスラエルよ、主によって望みをいだけ。主には、いつくしみがあり、また豊かなあがないがあるからです。主はイスラエルをそのもろもろの不義からあがなわれます。」

④ マタイ伝9章9～13節より

「イエスはこれを聞いて言われた、『丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である。』わたしは好むのは、憐みであって、いけにえではない』とはどういう意味か、学んできなさい。わたしが来たのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである。」

⑤ マタイ伝11章28～30節

「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもて来なさい。あなたがたを休ませてあげよう。わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、私の轡を負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。わたしの轡は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」



聖霊降臨記念日を迎えて

2023年5月28日

本年は5月28日（日）が聖霊降臨記念日（ペンテコステ）に当たります。
主キリストは、

「我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何を
か望まん。されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまでは、
思ひ逼ること如何ばかりぞや。（わたしは、火を地上に投じるためにきたのだ。火
がすでに燃えていたならと、わたしはどんなに願っていることか。しかし、わたしに
は受けねばならないバプテスマがある。そして、それを受けてしまうまでは、わたし
はどんなにか苦しい思いをすることであろう。）」（ルカ伝12章49～50節）
と胸の内を告白しておられます。

主キリストは、私たちが自己中心的な在り方（自我、肉）を脱して、神中心の在り方（霊）
へと転換するようにと願ってくださいました。神中心の在り方こそが、神の求め給う在り
方であり、永遠の命への道だからです。しかし、それは人間が努力して達成できるもので
はなく、主キリストが私たちの罪を引き受けてくださり、新しく生まれ変わらせてくださ
る以外に道がないことを悟られて、私たちの罪を背負って十字架にかかってくださいまし
た。この主キリストによる贖罪を信受・体受する者には、天国人としての新しい命と霊（聖
霊）をくださいました。本稿の最初に掲げた主キリストの御思いは、歴史的には、使徒行伝
第2章に記述されている五旬節の日の「聖霊降臨」において成就し、今日に至るまで、主
キリストは「聖霊・助け主・真理の御霊」のお姿で私たちを命付け、護り、導いてくださっ
ています。

私（奥田）の願いは、京都キリスト召団の聖日集會に集う方々が、この主キリストの熱い
御思いに応えて、新約聖書に記述されている「命の言葉」を霊の糧とし、御霊・御言葉と一如・
一体の日々を送ること、祈りの火を携えて聖日集會に集っていただき、京都キリスト召団
に「祈りの火」を燃やし続けて頂きたいことです。



まず、神の国と神の義とを求めよ！

2023年6月4日

マタイ伝福音書の第6章では「思い煩うな」との主キリストの御言葉が繰り返しかえし出てきます。それは思い煩わないではいられない現実生活のただ中で、それにもかかわらず、

「思い煩うことはないのだよ、思い煩わなくてよいように私（主キリスト）がしてあげるから、私に信頼して任せなさい」

との深い思いやりの主キリストの御思いが隠されています。

私たちの日々の生活は自然的及び人為的な様々な危険にさらされています。そうした中で、だからこそ、一層大切なことは、

「何はさておき、まず一番に求めるべきは、神の国と神の義である」

と主キリストは語り、求めておられます。そして、「神の国と神の義」の実質（体現者）は、主キリストご自身ですから、

「まず、神の国と神の義とを求めよ」

とは、

「まず、主キリストを求めよ」

ということになります。私（奥田）は、この「まず」が非常に大切だと思っています。朝、目覚めたとき、思い浮かぶのは何でしょうか？ その日に為すべきこととか、その日の体調であるとか、気がかりなことがいろいろあるかもしれません。そうした日々の現実において、主キリストが求めておられることは、まず何よりも主キリストご自身を求めること、主キリストに全托して生活を始めることだと思っています。

荒野の試みの中で語られた主キリストの言葉

「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」

や、ヨハネ伝福音書6章63節の御言葉

「人を生かすものは霊であつて、肉はなんの役にも立たない。わたしがあなたに話した言葉は霊であり、また命である。」

さらには、サマリヤの女との問答において語られた

「神は霊であるから、礼拝をする者も、霊とまことをもって礼拝すべきである。」

の御言葉は、御言葉の中に主キリストの命が宿っており、御言葉と御霊とが一如一体であることを教えています。

私が願ひ、また、皆様にお願ひしたいことは、「御言葉、御霊と一つなる生活」を貫くこと、そのためには、日々新たに、御言葉の集大成である新約聖書を身読（小池先生の言葉…頭ではなく、体で読め！）することが不可欠であると自覚しています。



御言葉と偕なる生活（その1）——旧約聖書の箴言及び詩篇から——

2023年6月11日

主キリストは弟子たちとの別れに当たって、

「わたしの戒めを心に抱いてこれを守る者は、わたしを愛する者である。わたしもその人を愛し、その人にわたし自身をあらわす」

と約束なさいました（ヨハネ伝14章21節）。

「ある人を愛するとは、その人の言葉を守ること（大切にすること）である」

ことが示されています。私（奥田）が

「御言葉を大切にし、御言葉と偕なる生活を！」

と呼び掛けるのは、主キリストが語られた言葉の中に主ご自身である「御霊のキリスト」が宿ってくださっているからです。主は、

「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言葉で生きるものである」

と語られ（マタイ伝4章4節）、

「わたしが命のパンである。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない」

と約束されました（ヨハネ伝6章35節）。新約聖書の福音書を読むことは、そこに現れている主キリストの言・行に直接に触れ、御霊のキリストに内住していただき（内住してくださっている御霊の主キリストに気づかされ）、霊的生命力に満たされるためです。

では、キリストの出現以前の「旧約聖書の時代」はどうだったのでしょうか？ イザヤ書、エレミヤ書、ホセヤ書、アモス書、ミカ書などにおいて、珠玉の御言葉に触れることが出来ますが、それらと並んで、詩篇や箴言においても、「珠玉の言葉」に触れることが出来ます。私が感動・共感した言葉を書き記してみよう（全部を書くことは出来ませんが）。

箴言第3章3～12節

「いつくしみと、まことを捨ててはならない。それをあなたの首に結び、心の碑にしるせ。そうすれば、あなたは神と人との前に恵みと誉れとを得る。心を尽くして主に信頼せよ。自分の知識に頼ってはならない。すべての道で主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道を真つすぐにされる。自分を見て賢いと思ってはならない、主を畏れて、悪を離れよ。そうすれば、あなたの身を健やかにし、あなたの骨に元氣を与える。あなたの財産と、すべての産物の初なりをもって主をあがめよ。そうすれば、あなたの倉は満ちて余り、あなたの酒ぶねは新しい酒であふれる。わが子よ、主の懲らしめを軽んじてはならない。その戒めをきらってはならない。主は、愛する者を、戒められるからである。あたかも父がその愛する子を戒めるように。」

詩篇103篇と139篇。33篇、34篇、46篇、55篇～57篇、94篇17節～19節。119篇28節、50節、54節、65節～67節、71節、81節、92節～94節、103節、105節、114節、130節、147節～148節。121篇、130篇。



御言葉と偕なる生活（その2）

2023年6月18日

詩篇119篇を見ますと、当時のイスラエルの人々が如何に「神の御言葉としての律法」を尊び親しんだかが分かります。例えば、

「汝の聖言は我が足の燈火、我が路の光なり。」（105節）

や、

「聖言うちひらくれば光を放ちて、愚かなる者をさとからしむ。」（130節）、

「汝の律法は、我が旅の家にて我が歌となれり。」（53節）、

「われ朝まだき起き出でて呼ばはれり、われ聖言によりて望みを抱けり。夜の更の来らぬに先立ち、わが眼はさめて汝の聖言を深くおもふ」（147、148節）

などがその一例です。また、詩篇1篇には、

「悪しきものの謀略に歩まず、つみびとの途に立たず、嘲る者の座にすわらぬ者は幸福なり。かかる人は主の法を喜びて、日も夜もこれをおもふ。かかる人は水流のほとりに植えし樹の、期にいたりて実を結び、葉もまた凋まざるごとく、その作すところ皆栄えん。」

と謳われています。まさに「御言葉と偕なる生活」の実践と、それに伴う祝福です。

神の言葉の大切さについては、旧約聖書中のアモス書に、

「主なる神は言われる、『見よ、わたしが飢饉をこの国に送る日が来る、それはパンの飢饉ではない、水に渴くでもない、主の言葉を聞くことの飢饉である。彼らは海から海へとさまよい歩き、主の言葉を求めて、こなた彼方へと馳せまわる、しかしこれを得ないであろう。その日には美しい乙女も、若い男も渴きのために氣を失う。』（8章11～13節）

と記されています。また、ミカ書6章6～8節には、

『わたしは何をもつて主のみ前に行き、高き神を拝すべきか。燔祭および当歳の子牛をもつてその御前に行くべきか。主は数千の雄羊、万流の油を喜ばれるだろうか。わが咎のためにわが長子を捧ぐべきか。わが魂の罪のためにわが身の子を捧ぐべきか。』人よ、彼は先に良いことのなんであるかをあなたに告げられた。主のあなたに求められることは、ただ公義を行い、慈しみを愛し、へりくだってあなたの神と共に歩むことではないか。」

と。私（奥田）が御言葉の大切さを強調し、御言葉と一如一体なる生活を提唱するのも、主キリストは、福音書において語られた御言葉の中に「御霊のキリスト」として宿っておられるからです。

「人が生きるのはパンだけに由るのでない。神の御口から出る一つ一つの言葉に由る。」

「人を生かすものは霊であつて、肉は何の役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である。」（マタイ伝4章4節、ヨハネ伝6章63節）

と語っておられる通りです。日々の祈りの中で「十字架・聖霊一如」の恵みを信受・体受しつつ、感謝と讃美の歩みを貫きたいと願います。



御言葉と偕なる生活（その3）

2023年6月25日

マタイ伝福音書6章21節には、主キリストの語られた言葉として、

「汝の財宝たからの在る所には、汝の心も在るべし。」
とあります。

私たちにとって「宝」は何でしょうか？ 福音書において語られている主キリストの御言葉や、御業、更には使徒行伝や使徒たちの書簡に記されている使徒たちの言葉や業（行為）が、「宝」として、状況に応じて励ましや支えとなります。ただし、そうなるためには日頃から新約聖書をよく読んでいることが大切です。詩篇第一篇に神の祝福にあずかる人の在り方として、

「かかる人は主の法のりを喜びて、日も夜もこれを思ふ」とあります。

「汝の財宝たからの在る所には、汝の心も在るべし。」

で、聖書が「宝」となっていることが欠かせません。イザヤ書30章15節、18～21節や、詩篇46篇なども「宝の御言葉」と言つてよいでしょう。

私（奥田）にとつては、信仰に導かれた初期の頃から、マタイ伝6章、とりわけ、25節～34節によって、どれほど励まされ、支えられてきたか測り知れません。

また、コリント前書10章13節

「汝らが遭ひし試練こころみは人の常ならぬはなし。神は真実まことなれば、汝らを耐へ忍ぶこと能はぬほどの試練に遇はせ給はず、汝らが試練を耐へ忍ぶことを得んために之と共に遁のがるべき道を備へ給はん。」

も、全くその通りです。また、

「人もし我に従ひ来たらんと思はば、己をすて、日々己が十字架を負ひて我に従へ。己が生命いのちを救はんと思ふ者は之を失ひ、我がために己が生命を失ふその人は之を救はん。」（ルカ伝9章23～24節、マタイ伝16章24～25節）

と、主キリストに全托して歩むようにと諭しておられます。

冒頭に掲げた「宝」とは、端的に言つて、「主キリストご自身である」と申し上げたく思います。そして、主ご自身と、主の語られた御言葉と御業みわざとは、一如・一体ですから、福音書に記されている「主キリストの御言葉と御業」を「宝」として、この宝と共に生きる、共に歩む日々でありたいと願います。この願いに主キリストは応えて、御霊をもつて導いてくださいます。感謝と讃美の祈りを捧げての日々でありたく願います。



わが生（人生）の原点

2023年7月2日

これまで、3回にわたって、「御言葉と偕なる生活」と題して語って来ましたが、今回は主キリストに導かれて歩んできた信仰生活の原点は何であつたのかについて、語りたいと思います。私の思いを代弁してくれているような詩篇があるので、まずそれを取り上げたいと思います。第139篇と第103篇です。第139篇、

「主よ、汝は我をさぐり、我を知り給へり。汝は我が座るをも立つをも知り、また遠くより我が念をわきまへ給ふ。汝は我が歩むをも我が臥すをも探りいだし、我がもろもろの途を悉く知りたまへり。そは我が舌に一言ありとも、視よ主よ汝ことごとく知りたまふ。汝は前より後より我を囲み、我が上にその聖手をおき給へり。かかる知識はいと奇しくして我に過ぐ、また高くして及ぶこと能はず。我いづこに往きて汝の聖霊を離れんや、我いづこに往きて汝の聖前をのがれんや。我天にのぼるとも汝かしこに在し、我わが床を陰府にまうくるとも視よ汝かしこに在す。我曙の翼をかりて、海の極に住むとも、かしこにて尚汝の聖手我を導き、汝の右の聖手我を保ち給はん。暗は必ず我をおほひ、我を囲める光は夜とならんと我いふとも、汝の聖前には、暗きもものを隠すことなく、夜も昼のごとくに輝けり、汝には暗きも光も異なることなし。」

ここまででは、恵み深き神の、我に対する圧倒的な御思いを語り、讃美しています。続いて更に、「我」という存在そのものに対する神の創造の御業に対する感謝と讃美が語り出されます。

「神よ汝の諸々の聖念は我に貴きこと如何ばかりぞや、その聖念の総計はいかに多きかな。我これを数えんとすれどもその数は沙よりも多し、我眼さむるときも尚汝と共にをる。（中略）神よ願はくは我を探りてわが心を知り、我を試みてわがもろもろの念を知りたまへ。願はくは我に邪曲なる途の有りや無しやを見て、我を永遠の道に導きたまへ。」

このような、自分に対する神の愛への信頼と帰依の思いは、第103篇の讃美と感謝へと展開して行きます。その感謝と讃美の拠り所は、

「全ての不義の赦しと全ての病の癒し、永遠の命を与え給うこと」

で、主キリストの救いの御業の予告であり、それに対する感謝・讃美だと言えます。主キリストは、この予言を成就してくださいました。ヨハネ伝15章16節に、

「汝ら我を選びしに非ず、我汝らを選べり。」

とあるように、全ては主キリストの愛の御業であり、私たちは、これに全幅の信をもつて委ねて歩むのみです。



神讃美・キリスト讃美に徹する（詩篇 139 篇から 103 篇へ）

2023年9月10日

詩篇 139 篇は、神の人（我）に対する「絶対愛」への感謝と讃美を高らかに謳うたっています。その思いに共鳴するかのように、103 篇も主（神）の愛の御業への感謝と讃美を謳うたっています。旧約聖書中のイザヤ書では、40 章以下が神の現実的な救いの御業の預言です。特に 53 章では神の僕しもべとしての主イエス・キリストの受難とそれによる人間の救いの預言が述べられています。

新約聖書では、

- ① ヨハネ伝 3 章 16 節～21 節 「神はそのひとり子を賜ったほどに」
- ② 同 4 章 22 節 「神は霊なれば、拝する者も霊と眞とをもて拝すべきなり」
- ③ 同 6 章 63 節 「活かすものは霊なり、肉は益する所なし。わが汝らに語りし言は、霊なり、生命なり。」
- ④ 同 15 章 5～17 節 「我は葡萄の樹、なんじらは枝なり。」
- ⑤ ヨハネ第一書 4 章 9 節～11 節
- ⑥ ペテロ第一書 1 章 3～9 節
- ⑦ コリント前書 1 章 18～31 節
- ⑧ コロサイ書 3 章 1～4 節



天国人らしく生きる！

2023年9月17日

神が愛する者（わたしたち）のために備えたもうたことは、

「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮かびもしなかったこと」

でありました（コリント人への第一の手紙2章9節）。それは、神の御子キリストが、わたしたちの「根源的な罪」（自我を立て、御心に背くという在り方、生き方）をご自分の罪として引き取り、十字架上で死をもつてあがなってください、新しい命を賜って、真に「神の子」らしく生きるという「恵みの事態」でありました。

聖書は人間の生来の自己中心的な生き方を「肉」と言い、主イエスが生きられた「神中心の生き方」を「霊」と呼んでいます。そして、

「肉の思いは死であるが、霊の思いは、いのちと平安とである。」

と宣言しています（ローマ人への手紙8章6節）。神は、主キリストの十字架上で死において、我らの「肉」なる生き方を滅ぼし、新しく「霊」なる生き方をするように道を開いてくださいました。ガラテヤ書2章19節～21節に、

「わたしは、神に生きるために、律法によって律法に死んだ。わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きているのは、もはや、（旧き）わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあつて生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって、生きているのである。わたしは、神の恵みを無にはしない。もし、義が律法によって得られるとすれば、キリストの死はむだであつたことになる。」

と述べられています。

「天国人らしく生きる」とは、現実の自分（生来の自分）がどうであろうとも、主キリストの「贖いの愛」を信受・体受した「新しい自分」は、「天国人」とされている。だから、「天国人」として、神・キリストの望み給う生き方をするように、それを貫くことが出来るように、との悲願・霊願の祈りをもつて生きる者であります。



艱難を乗り越える——試練の中での希望——

2023年9月24日

私たちを取り巻く現在の環境は、地球規模で「危機的」と言えます。「温暖化」によって、様々な危険な状況がもたらされました。そのほか、我が国について言えば、地震や豪雨による被害も各地で見られるようになりました。新型コロナウイルスの感染拡大防止のためのマスクの着用が長期間にわたり推奨されたことも最近の事でした。かつては、科学の進歩と相まって、バラ色の未来の到来が夢見られていましたが、現在では、未来をそのように楽観的に見る人は少ないのではないのでしょうか。

では、このように将来において様々な困難、艱難が予想される現代においては、平安な心で日々を過ごすことは望めないのでしょうか？ 私はこうした問題を考える際に、いつも思い浮かべるのは、夜明け方、ガリラヤ湖上で漕ぎ悩む弟子たちのところへ、波を踏みしめつつ近づき、

「我なり、恐るな、心安かれ！」

と声を掛けて励まされた主キリストのお姿です（マタイ伝14章22～33節、マルコ伝6章48～52節、ヨハネ伝6章16～21節）。主は弟子たちとの別れに際して、

「これ等の事を汝らに語りたるは、汝ら我に在りて平安を得んが為なり。汝ら世に在りては患難あり。されど雄々しかれ。我すでに世に勝てり。」

と励ましておられます（ヨハネ伝16章33節）。私たちがさまざまな困難に直面した時、御霊の主キリストは、

「わたしが付いているから大丈夫だ。わたしが与える平安の中に安らつていなさい」

と励ましてくださいます（ヨハネ伝14章27節参照）。

使徒パウロは、ロマ書5章において、

「患難をも喜ぶ。そは患難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生ずと知ればなり。希望は恥を来らせず、我らに賜ひたる聖霊によりて神の愛われらの心に注げばなり。」（3～5節）

と患難の効用を謳っています。同様にコリント後書4章17節では、

「我らが受くる暫くの軽き患難は、極めて大なる永遠の重き光栄を得しむるなり。」

と患難にも屈しない心意気を告白しています。

私たちは、どのような困難な状況下においても、こうしたみ言葉と御霊の御護りと御導きの中で「艱難を乗り越え」て、神・キリスト讃美の日々を送りたいと願っています。



「聖意現成・聖意体現」の祈りに生きる！

2023年10月1日

私（奥田）は、この度、満91歳の誕生日を迎え、改めて、これまで生かしてくださった主キリストの絶大な恵み（ご愛）に感謝するとともに、聖なる御意（聖意）をこの身に体して、その実現を祈り求めてゆきたいと願っています。講筵題目に掲げた「聖意現成」とは、神・キリストの御意志（聖意）をこの身（わが身）において成就してくださいように、との祈り・願いを指しています。「聖意体現」とは、「聖意現成」を踏まえて、この身において聖なる御意（聖意）を実現してゆくことが出来ますように、との祈り・願いを指しています。主キリストご自身が、父なる神様に対して、「聖意現成・聖意体現」の祈りを捧げ、父なる神の御心（御意志）を実現・成就して行われました。

私たちは、新約聖書の福音書や、パウロ、ヨハネ、ペテロの書簡から、神・キリストが何を願い、求めておられるかを知ることが出来ます。信仰とは、このようにして知ることのできた神・キリストの聖なる御意を受け取り、それにふさわしい生き方を実践することに他なりません。それには、日々、御言葉に接していること、祈り心でいることが大切です。信仰に導かれての初期の頃に感動した御言葉は、マタイ伝5章43節から48節のキリストの御言葉であり、同第6章の御言葉です。とりわけ、第6章25節から34節は、私にとっての「導きの星」でありました。

「汝らの天の父は、凡てこれらの物の汝らに必要なるを知り給ふなり。まづ神の国と神の義とを求めよ、さらば凡てこれらの物は汝らに加へらるべし。この故に明日のことを思ひ煩ふな。明日は明日みづから思ひ煩はん。一日の苦勞は一日にて足れり。」

さらに、マタイ伝の11章25節から30節の御言葉です。

「凡て勞する者・重荷を負ふ者、われに來れ、われ汝らを休ません。我は柔和にして心卑ければ、我が軛を負ひて我に學べ、さらば靈魂に休息を得ん。わが軛は易く、わが荷は輕ければなり。」

現在の心境を「詩篇」から引用するならば、第139篇は、神・キリストの我（私）を見てくださっている御思いであり、それを踏まえて、第103篇は感謝と讚美の祈りの詩篇です。また、第94篇の17節〜19節も全くその通りです（「エホバ」とあるのを「主キリスト」と置き換える）。以上、新約聖書および詩篇から、「み言葉」の一端を書き記しましたが、正に

「あなたの聖言は我が足の燈火、わが路の光なり。」

であります。皆様も、どうぞ、「み言葉」を「命の糧」として愛読・身読なさってください。



我活くれば汝らも活くべければなり

2023年10月8日

講筈題目に掲げた言葉は、主キリストが弟子たちとの別れに当たって語られた御言葉（訣別遺訓）の中の言葉です。主キリストの地上での生命（肉体の生命）は、十字架上の死をもって終わります。その死を前にして、主は、この言葉をもって弟子たちを励まされました。あの山上での変貌（栄化）で示されているように、主キリストは本来、肉体の「死」とは無縁なお方です。「永遠の生命」ということを語るとすれば、主キリストこそが「永遠の生命者」でありました。そのお方が、我々と同じく肉体の死を味わってくださった、それも残酷極まりない「十字架上の死」を味わってくださったのは、我々の味わうべき「死」を引き受けてくださった、我々の「死」からその暗黒面を取り去ってくださり、平穏な思いで死を受容し、肉体の死のあなたに待っている栄光の霊体へと変貌する道を開いてくださったと言えると思います。そして、ご復活の事態をもって、私たちも同じく栄光の霊体を賜って輝き続ける道を備えてくださったと思っています。正に

「我活くれば汝らも活くべければなり」

を現実の事態としてくださいました。このように見れば、ヨハネ伝3章16節の

「それ神はその独子^{ひとりご}を賜ふほどに世を愛し給へり、すべて彼を信する者の亡びずして、永遠の生命を得んためなり。」

や、

「我彼らに永遠の生命を与ふれば、彼らは永遠に亡ぶることなく、又かれらを

我が手より奪ふ者あらじ。」（ヨハネ伝10章28節）

の御言葉を感謝をもってお受けすることが出来ます。

私が嬉しく思うのは、主キリストが

「我活くれば汝らも活くべければなり。」

の御言葉をもって、

「あなたが一人で生きるのじゃないよ、私がいつも一緒だからね！」

と語りかけてくださっていることです。私の贖い主、救い主であり給う主キリストが、そのような語り掛け、励ましてくださるなら、どんなことがあっても、この主と共に生きないではられないではありませんか！



愛は寛容にして慈悲あり、信じ抜き望み抜き耐え抜く

2023年10月15日

講筵題目に掲げた言葉は、「コリントの信徒への第一の手紙」(コリント前書)第13章から引いたものです。これを主キリストのお姿や御言葉と照らし合わせると、思い浮かぶのは、マタイ伝福音書第5章の以下の御言葉です。

『なんぢの隣を愛し、なんぢの仇を憎むべし』と云へることあるを汝等きけり。されど我は汝らに告ぐ、汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。これ天にいます汝らの父の子とならん為なり。天の父は、その日を悪しき者のうへにも善き者のうへにも昇らせ、雨を正しき者にも正しからぬ者にも降らせ給ふなり。なんぢら己を愛する者を愛すとも何の報をか得べき、取税人も然するにあらずや。兄弟にのみ挨拶すとも何の勝ることかある、異邦人も然するにあらずや。さらば汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ。』(5章

43〜48節)

講筵題目に掲げた「寛容にして慈悲あり、信じ抜き、望み抜き、耐え抜く」とは、主キリストの私たちに對する態度だと言えるのではないのでしょうか。私たちの罪過を引き受け、十字架上の死をもつて贖つてくださった主キリストは、新生の命を賜つただけではなく、新生の私たちが主の御心に叶う生き方、在り方をするようにと、寛容と慈悲・慈愛をもつて導き、護り給ひ、必ずそうなる信じ抜き、望み抜き、耐え抜いてくださっているのではないのでしょうか。そのことに気が付くと、私たち自身の、他人に對する在り方・態度も、「寛容にして慈悲深く、信じ抜き、望み抜き、耐え抜く」まことの「愛」の相でありたいものと願います。「ヨハネの第一の書」第4章7節以下には、

「愛する者よ、われら互に相愛すべし。愛は神より出づ、おほよそ愛ある者は、神より生れ神を知るなり。愛なき者は神を知らず、神は愛なればなり。神の愛われらに顯れたり。神はその生み給へる独子を世に遣し、我等をして彼によりて生命を得しめ給ふに因る。愛といふは、我ら神を愛せしにあらず、神われらを愛し、その子を遣して我らの罪のために宥めの供物となし給ひし是なり。愛する者よ、斯くのごとく神われらを愛し給ひたれば、我らも亦たがひに相愛すべし。未だ神を見し者あらず、我等もし互に相愛せば、神われらに在し、その愛も亦われらに全うせらる。神、御霊を賜ひしに因りて、我ら神に居り神われらに居給ふことを知る。」(4章7〜13節)

「愛には恐れなし。全き愛は恐れを除く、恐れには苦難あればなり。懼るる者は、愛いまだ全からず。我らの愛するは、神まづ我らを愛し給ふによる。」

(4章18〜19節)

と、神の全き愛を信じて、これに全托して生きるようにと勧められています。



その力、汝（神・キリスト）に在り、その心、シオンの大路に在る者は恵福なり

——詩篇第84篇5節——

2023年10月22日

講筵題目に掲げた詩篇では、更に続けて

「その力、汝に在り、その心、シオンの大路に在る者は恵福なり。彼らは力より力に進み、遂におのおのシオンに至りて神にまみゆ。万軍の神・主よ、わが祈をきき給へ、ヤコブの神よ、耳をかたづけ給へ。（中略）汝の大庭に住まふ一日は千日にもまされり、我は惡の幕屋に居らんよりは、寧ろ我が神の家の門守とならんことを願ふなり。そは神・主は日なり盾なり、主は恩と榮光とを与へ、直く歩む者に嘉き物を拒み給ふことなし。万軍の主よ、汝に依り頼む者は幸福なり。」

この詩を読むと、詩人の、神（主）に対する一途な信頼と親愛の思いと祈りに心打たれる思いが致します。私たちは、はたして、そこまでの一途な思いで主キリストに信頼し、全托して歩んでいるだろうか、と。主キリストは、一人の教法師との問答の中で最も重要な戒律として、

『第一は是なり「イスラエルよ聴け。主なる我らの神は唯一の主なり。汝、心を尽くし、精神を尽くし、思ひを尽くし、力を尽くして、主なる汝の神を愛すべし」第二は是なり「おのれの如く汝の隣を愛すべし」此の二つより大なる戒めは無し』

と答えておられます（マルコ伝福音書12章28～31節、マタイ伝22章34～40節）。

私（奥田）にとつては、「神は、神なるが故に、全身全霊をもつて愛すべきである」というよりも、主キリストが捨身（棄て身）の御愛をもつて、我が罪を贖い、永遠の生命を与えてくださり、御霊をもつて日々、この身を活かし護り導いて在り給うが故に、この主キリストと「一如一体」でありたい、と願っています（「我キリストの中に、キリスト我が内に」）。

このような視点から詩篇を読むとき、共感を覚える詩篇を幾つか挙げておきます。
33篇、34篇、36篇5～10節、37篇1～11節、55篇22節、57篇1～3節、62篇3～8節、63篇1～8節。

以上は、ほんの一例にすぎません。各自で、ご自分にとって大切な、愛唱歌をお選びください。



神は我らの避け所また力、悩める時のいと近き助けなり（詩篇46篇）

2023年11月5日

「講筵題目」の「神は」を「主キリスト（御霊のキリスト）」と読み替えます。

「悩める時」（なやめるとき）の「な」を取ると、「やめるとき（病める時）」となります。

私（奥田）は、この度、10月27日（金）の夕方から体調を崩し、29日（日）の「聖日集会」を休み、その日は奥田不在で「聖日集会」を開催して頂きました。31日（火）には、すっかり元気になり、元の生活に戻ることが出来ました。その間、近親者には種々の配慮を頂き有難いことでした。集会の皆様も祈りをもって支えてくださったことを深く感謝しています。小池辰雄先生作の讃美歌集の「B類② 使徒らの昔を」の〈おりかえし〉「み霊の我が主はわが身を抱き十字架に耐え得る力を賜う」を実感し有難く思いました。

旧約聖書のイザヤ書第43章に次のような記述があります。

「ヤコブよ、あなたを創造された主はいまこう言われる。『恐れるな、わたしはあなたをあがなつた。わたしはあなたの名を呼んだ、あなたはわたしのものだ。あなたが水の中を過ぎるとき、わたしはあなたと共に居る。川の中を過ぎるとき、水はあなたの上にあふれることがない。あなたが火の中を行くとき、焼かれることもなく、炎もあなたに燃えつくことがない。わたしはあなたの神、主である、イスラエルの聖者、あなたの救い主である。（中略）すべてわが名をもつてとなえられる者をこさせよ。わたしは彼らをわが栄光のために創造し、これを造り、これを仕立てた』（1〜7節）

また、44章21〜23節には、

「ヤコブよ、イスラエルよ、これらの事を心にとめよ。あなたはわがしもべだから。わたしはあなたを造つた。あなたはわがしもべだ。イスラエルよ、わたしはあなたを造つた、あなたはわがしもべだ。イスラエルよ、わたしはあなたを忘れない。わたしはあなたの咎を雲のように吹き払い、あなたの罪を霧のように消した。わたしに立ち返れ、わたしはあなたをあがなつたから。天よ、歌え、主がこの事をなされたから。地の深き所よ、呼ばわれ。もろもろの山よ、林およびその中のもろもろの木よ、声を放って歌え。主はヤコブをあがない、イスラエルのうちに栄光をあらわされたから。」

さらに、46章3〜4節には、

「ヤコブの家よ、イスラエルの家の残つたすべての者よ、生れ出た時から、わたしに負われ、胎を出した時から、わたしに持ち運ばれた者よ、わたしに聞け。わたしはあなたがたの年老いるまで変らず、白髪となるまで、あなたがたを持ち運ぶ。わたしは造つたゆえ、必ず負い、持ち運び、かつ救う。」

とあります。主キリストは、これらの預言の言葉を、悉く成就して、わたしたちに希望と勇気を与えてくださっています。御霊の主キリストこそは、「我らの避け所、いと近き助け」であり、担い、励まし、力づけてくださる「真の友、救い主」であり給います。



汝ら、心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ（ヨハネ伝 14 章 1 節）

2023年11月12日

「講筵題目」に掲げた言葉は、主キリストが弟子たちとの別れに当たって語られた言葉（「訣別遺訓」と呼ばれているもの）の最初の部分で、口語訳では

「あなたがたは心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。」と訳されています。

わたしたちの現実の生活においては、自然災害をはじめ、人為的な災害もまた、日々見聞するところです。そのような現代の状況の中にあっても、この主キリストの御言葉は、私には、現実的な力として、生活の支えとなっています。わたしたちが安んじて「神・キリストの御護りと御導き」に全面的に依存して生活することが出来るのは、「神の愛の故」（神・キリストは「愛」のお方なのだから）と簡単に言うことが出来るかもしれませんが、私は、そうは思いません。人間は、生来、「自己中心的」な存在であり、信仰もまた、「わたしを守ってくれるから、わたしを幸せにしてくれるから」という風に、「神」を「人間を幸せにすべき存在」（人間の幸福に奉仕すべき「しもべ」という風に見ている人が多いのではないでしうか。このような「自己中心的な在り方」こそが、聖書において「罪」として捉えられている事態であって、

「義人はいない、ひとりもない。悟りのある人はいない、神を求める人はいない。すべての人は迷い出て、ことごとく無益なものになっている（以下、略）」

（ロマ書 2 章 10 ～ 11 節）

と記されている通りです。このような「人間の根源的・本性的罪（原罪）」を根底から担い、十字架で裁きを受け給うて十字架上の死をもつて、「贖罪」を全うしてくださり、ご自身の御復活の命をわたしたちに与えてくださったことにより、わたしたちは、真に生きる者とされました。それだけではなく、

「あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたにとどまっているならば、なんでも望むものを求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。（中略）父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛したのである。わたしの愛のうちにいなさい。」（ヨハネ伝 15 章 7 ～ 9 節）

と呼び掛けてくださっています。

「十字架上の死」をもつて、まさに「ご自身の命を懸けて」わたしたちに「新生命」を賜っただけではなく、「力ある御護りと御導き」の中で、わたしたちの日々を護り導いていてくださっていることを思うならば、現実にとどのような不如意な事態に遭遇しようとも、また、自分自身の至らなさや失敗がどのようなものであるうとも、

「心を騒がすことなく、神・キリストに信頼し、全托して」

感謝と讃美の日々を送りたいと願います。



神・キリスト讃美の生涯を！

——詩篇第139篇と第103篇——

2023年11月19日

詩篇第139篇は、神・キリストの慈愛を謳い、それを踏まえて第103篇は、神・キリスト讃美を謳い上げている詩篇です。詩篇は文語訳の方が心に響くように思いますので、以下には文語訳から引用致します（但し、「エホバ」と表記されているのは、「主」と表記し、「なんぢ」は「汝」と表記します）。第139篇は、神が自分のことを、如何に深い慈愛の御思いで見ているくださるか、その素晴らしさに驚嘆し、感謝と讃美を謳い上げています。

「汝は前より後より我を囲み、我が上にその聖手をおき給へり。……我いつこに往きて汝の聖霊を離れんや、……汝の聖前を逃れんや。……暗は必ず我をおほひ、我を囲める光は夜とならんと我言ふとも、汝の聖前には暗もものを隠すことなく、夜も昼のごとくに輝けり、汝には暗も光も異なることなし。」

と、神のご臨在と御業の素晴らしさを讃えたあと、一転して、自分が神の創造したもうた存在であることへの感謝と讃美が捧げられています。

「神よ、汝のもろもろの聖念は我に貴きこと いかばかりぞや、その聖念の総計はいかに多きかな。」

と。第103篇

「わが靈魂よ主を讃めまつれ、わが衷なる凡てのものよその聖き御名を讃めまつれ。わが靈魂よ主を讃めまつれ、その凡ての恩恵を忘るるなかれ。主は汝がすべての不義をゆるし、汝のすべての疾を癒し、汝の生命を滅亡より贖ひいだし、仁慈と憐憫とを汝に冠らせ、汝の口を嘉物にて飽かしめ給ふ、かくて汝は壮やぎて驚のごとく新になるなり。（中略）主を畏るる者に主の賜ふその憐みは大にして、天の地よりも高きがごとし。その我らより咎を遠ざけ給ふことは、東の西より遠きがごとし。主の己を畏るる者に主の賜ふその憐みは大にして、天の地よりも高きがごとし。……人の齢は草のごとく、その栄は野の花のごとし。……然はあれど主の憐憫は永遠より永遠まで主を畏るる者にいたり、その公義は子孫のまた子孫に至らん。……わが靈魂よ主を讃めまつれ。」

主キリストを知らない人たちが、このように神の恵みを全存在的に讃えている姿に感動致します。キリストの福音に与かっている私達が、それ以下であつては申し訳ないと思います。



七転八起の人生

2023年11月26日

私達は、これまでの人生において、様々な試練に見舞われながらも、その都度、不思議な助けを賜って無事に逃れることが出来たということを体験してきました。自然災害を含め、様々な危険は、万人に等しく訪れるもので、クリスチャンだからといってそれを免れるわけにはいかないようです。

「クリスチャンだから、いつも、絶対に安全」

というわけではない、ということ です。しかし、私達は、どのような試練に見舞われても、必ず、そこから脱出し、それを乗り越えて立ち上がり、前に向かって進む事が出来ました。その秘訣は、見えないところで、神・キリストの御護りと御導きがあつたからだと言わざるを得ないことを私達は体験してきました。

新約聖書における使徒パウロの言葉を引用するならば、次のように記されています。

コリント前書10章13節

「汝らが遭ひし試練は人の常ならぬはなし。神は眞實なれば、汝らを耐へ忍ぶこと能はぬほどの試練に遭はせ給はず、汝らが試練を耐へ忍ぶことを得んために之と共に遁るべき道を備へ給はん。」

コリント後書4章7～18節（抜粋）

「我等この宝を土の器に有てり。これ優れて大なる能力の我等より出でずして、神より出づることの顕れんためなり。われら四方より患難を受くれども窮せず、為ん方つくれども希望を失はず、責めらるれども棄てられず、倒さるれども亡びず、常にイエスの死を我らの身に負ふ。」

これイエスの生命の我らの身にあらはれん為なり。それ我ら生ける者の常にイエスのため死に付さるるは、イエスの生命の我らの死ぬべき肉体にあらはれん為なり。さらば死は我等のうちに働き、生命は汝等のうちに働くなり。（中略）これ主イエスを甦へらせ給ひし者の我等をもイエスと共に甦へらせ、汝らと共に立たしめ給ふことを我ら知ればなり。凡ての事は汝らの益なり。これ多くの人によりて御恵みの増し加はり、感謝いや増りて神の栄光の顕れん為なり。この故に我らは落胆せず、我らが外なる人は壊るれども、内なる人は日々に新なり。それ我らが受くる暫くの軽き患難は、極めて大なる永遠の重き光栄を得しむるなり。我らの顧みる所は見ゆるものにあらで見えぬものなればなり。見ゆるものは暫時にして、見えぬものは永遠に至るなり。」

コリント前書15章35～58節。大切なことは、いつも、祈り心で、「御霊の主キリストと一如一体で在らせてください」との思い、願いの中で歩む事だと思っています。

